詫間中学校
道徳通信

2020.9.24(木)

こころの玉手箱 9月号

「弥谷寺　昔話」

私たちの住む香川県三豊市には，多くの伝説や昔話が残されています。今回の『イ～なの日』ではその中の１つ，弥谷寺にまつわる昔話に学びました。名高い二人の僧侶「弘法大師」と「守敏大師」。ひょんなことから，この二人が法力比べを行うことになりました。火上山の天辺から山の下まで一夜に井戸を掘ると言う守敏大師と，弥谷寺の裏山に４万８千体の仏像を彫るという弘法大師。さて，勝負の行方は・・・

☆　1年生　☆

☆　勝ち負けや，人を下に見るなどは「己の貧しさ」となると思います。勝ち負けは必要なときもあるし，必要じゃないときもあると思います。三豊市の昔話をもっと知りたいです。

☆　勝ち負けを競うのは，自分も部活動で誰かに勝ちたいので悪くは思わないけれど，勝ち負けより他の人への思いやりが大切だと思いました。

☆　負けず嫌いで勝ち負けにこだわることがあるけど，守敏大師のように嘘をついて自分が勝ったように思わせるのはしたくないです。でも，後から自分を振り返ってやり直せたのがすごいと思いますた。

☆　弥谷寺には行ったことがあるけど，あの大仏が何を表しているのかいまいち分からなかったので，今日読んで，ああ，そうだったのか，と思いました。もう一回行ってみたいです。

☆　2年生　☆

☆　弘法大師はすごい人と聞いていましたが，すごいのは技術面だけでなく，心もすごいことが思いました。一生懸命に仏像のことだけを考えて彫った弘法大師の勝ちだと思いました。

☆　はじめから勝負する気はなく，自分のした行動の意味やつなぎ方まで考えていた弘法大師は本当の意味で立派なんだと思います。でも，それを反省している守敏大師も自分の過ちを理解しているのですごいと思いました。

☆　守敏大師は決して悪いことをしていないんだけど，守敏大師は大事なことを見失っていると思った。ついつい人間は，勝負になると我を忘れてしまうところが誰にでもあると思うので，それをこれから忘れないようにがんばっていきたい。

☆　違うことをしているので勝ち負けはつけられないし，勝負をして勝ち負けをつけて意味があるのかなぁと思いました。どちらもすごいお坊さんなんだから，どちらがすごいとか決めなくていいのになぁと思いました。

☆　3年生　☆

☆　勝負にこだわった守敏大師と勝負にこだわらず後世の人々を信じた弘法大師の２人のように，ズルをしてでも勝つのか，人のことを考えることができるのか，人間の気持ちの争いを描いた昔話だと思った。

☆　三豊市にまつわる昔話にこんなものがあるとは知りませんでした。私が知っているのはうらしまのことだけです。生里→「生まれた所」　紫雲出山→「紫の雲がかかった山」　少し興味が湧いたので，また調べたいです。

☆　三豊市にも「うらしま伝説」があり，本当なのだろうかと考えることはあった。今回の話のように，昔話を通して教訓を学べるのはいいことだと思う。

☆　己の心の弱さを認めた守敏大師がすごいと思った。事実をごまかして勝ったのはいいことではないが，しっかりと反省できるのは大切だと思う。

☆　大切だと言われていることは，今も昔も変わらないのだなと思った。自分達の地域のことを振り返ることで，様々な考え方を知ることができるのはとてもいいことだと思った。

保護者の皆さんへ

お子様と意見を交換して，感想などをお気軽にお寄せください。

切り取り線

保護者返信欄（お子さんを通じて担任までお渡し下さい。）

『弥谷寺　昔話　～弘法大師と守敏大師の法力比べ～

むかし，むかし，とてもえらいお坊さん２人が法力合戦をしました。その日は秋というのに，朝からとても蒸し暑い一日だったそうです。

里の人たちは，「今日は大変な一日になるぞ。」「盆と正月が一緒にきたようじゃ。」と話していました。

それもそのはず，火上山の天辺から山の下まで一夜に井戸を掘ると言っている守敏大師。一方，弥谷寺の裏山に四万八千体の仏像を彫ると言っている弘法大師。どちらのお坊さんも四国はもとより日本で二人といない立派なお坊さんなので，里の人にとってみればこんな素晴らしい「法力合戦」を目の前で見られるのだから，興奮するのも無理はありません。

「おい，今日の法力合戦どっちのお坊さんが勝つのかのー。」里の人たちは，噂していました。

「だけどな一勝負は誰が決めるのじゃ。」

「それは，えらいお坊さんのこと，自分自身で終わったことを知らせる合図の煙を山よりあげるそうな。」

「それじゃ，わしらはここから山を見とったらわかるのかのう」

「そうじゃ，そのあと山に行って実物をみたらわかるがな。」と騒ぎ立てた。

二人のお坊さんは日暮れと共に，一心不乱に仏像と井戸掘りを始めました。それはそれは，お坊さんが一人でほったりしているものとは思えない程，素早い動作でほっていったという。時が過ぎ，東の空が白く夜が明けてきました。里の人たちは，息を殺してどちらが勝つか，眺めていました。その時，東の空に紅い帯を引いた朝焼けの火上山の天辺より煙が上がりました。里の人たちは，その煙を見て，守敏大師が勝ったと騒ぎ立てました。

ところが，本当のところ，守敏大師はまだ，２，３メートル残したところで，煙をあげたそうです。一方，弘法大師は，夜が明けると共に，ノミや石鎚を片付け，仏像に魂を入れ，ご来光を待っていました。自分が勝負に勝ったことは分かっていましたが，煙をあげることはしなかったそうです。弘法大師は，「人間のすることは，勝ち負けではない。里の人たちは騒いでいるが，私がしたことは後世の人たちにはきっと分かってもらえるもの」と信じ，己が一心不乱に彫った仏像が，人々の願いを叶えてくれることで答えが出ると確信し，勝ち負けにはこだわらなかったということでした。

それに引き換え，自分が勝負のみを考えた「己の心の貧しさ」を感じ取った守敏大師は，火上山山麓に己の心のおろかさを弘法大師や里の人たちにお詫びする為に，弥谷山に向かって石仏を彫ったそうです。

その石仏は，座って心を静め，目から涙を流している石仏だったと言われています。

参考文献：　弥谷寺ＨＰ　昔話

保護者からの声　『ウイルスの次にやってくるもの』

○　恐怖を感じることは，人間誰しも感じることです。それを怖いからではなく，向き合って，確かな情報を知ることが大切だと思います。

○　コロナは怖い病気だと思いますが，一人一人が自分自身の行動に注意して予防を行っていくことで，感染の確率を減らせることは間違いありません。誰しもウイルスに感染したいと思う人はいません。何よりも怖いのは不幸にも感染してしまった人を叱責してしまう人間の心だと思います。情報過多な昨今，「思い」よりも「想い」を忘れないようにコロナウイルスに負けない「想いやり」の輪が広がっていくように，親子で日々考え，行動していきたいと想っています。

○　「これを見てみて！」と言われました。他のことをやっていて聞き取れないと，また言うので，よっぽど私に伝えたいことなのだと感じました。不確かな情報に惑わされ，罪のない人を傷つけたり，不必要におびえて，暗い世の中になることが問題だと感じました。最近，世の中を憂う会話が夫婦間でも多くなっていたかもしれません。娘がそう伝えたかったように感じました。

○　感染者がいない県では，第一人者になるのを恐れて検査に躊躇してしまうと聞いたことがあります。感染者が出るとその人が悪いかのように犯人捜しが始まる，偏見と差別の始まりです。不確かな噂を広めたり，憶測で判断せず，確かな情報を新たな生活・生き方の教訓として，どう向き合っていけばよいのか，前向きに考えるときだと思います。

いつもたくさんのご返信，ありがとうございます。紙面の都合上，ご返信頂いた感想の一部のみを掲載しています。ご了承ください。